

7) 当院における慢性C型肝炎インターフェロン治療の副作用についての検討

瀧本 光弘・石川 直樹  
 太田 宏信・本間 明  
 尾崎 俊彦・宮尾 浩美 (済生会新潟第二)  
 本間 智子・百都 健 (病院内科)  
 石原 法子 (同 病理検査科)

1992年1月から1994年2月まで当院でインターフェロン治療を受けた肝疾患44例を対象とした。組織型と有効度の関係では CIH とAVH に著効と有効例が多い傾向が認められた。副作用のため7例が治療中止となった。内訳は、間質性肺炎1例、甲状腺機能亢進症1例、白血球減少2例、肺炎1例、うつ状態1例、口内炎と食思不振1例であった。間質性肺炎の症例は小柴胡湯を併用していた。

間質性肺炎と甲状腺機能亢進症をおこした2例について症例を示した。

肝疾患におけるインターフェロン療法を安全、確実に施行するため定期的な検査とその時期等のマニュアル化が必要であると考えた。

8) 吸着型血漿浄化を行ったメソトレキサート (MTX) 中毒の1例

伊藤 実・加藤 俊幸  
 齊藤 征史・丹羽 正之 (県立がんセンター)  
 井上 博和・小越 和栄 (新潟病院内科)  
 小林 宏人・守田 哲郎  
 平田 泰治・堀田 利雄 (同 整形外科)

症例は17歳男性。平成4年10月5日に、左大腿骨遠位骨肉腫と診断された。MTX 大量療法 (200 mg/kg) を4コース施行後、同年12月21日、広範囲切除、Kotz 左人工膝関節置換術を施行。術後、MTX 大量療法 (200 mg/kg) を4コース施行したところ、4コース目の治療の後、MTX 血中濃度が下がらず、WBC: 1,800、Hb: 8.3 g/dl、Plt.:  $3.5 \times 10^4$ 、GOT: 353 IU/l、GPT: 675 IU/l、LDH: 978 IU/l、TB: 5.8 mg/dl、PT: 64.9%、BUN: 52 mg/dl、クレアチニン: 7.6 mg/dl と、骨髓抑制とともに、肝・腎不全を生じた。MTX 中毒と診断し、ロイコポリンレスキュー下に MTX 吸着による血漿浄化方法を9回施行した。MTX 血中濃度の低下とともに、肝・腎機能が回復した。MTX 中毒は予測できず、突然重篤な副作用として発現することがある。MTX 中毒に対しては、ロイコポリン投与とともに吸着型血漿浄化は有用であると考えられた。

9) 重症肝炎に対する PGE<sub>1</sub> 製剤投与の有用性

杉山 幹也・米倉 研史 (新潟県立中央病院)  
 植木 淳一・畠山 重秋 (内科)  
 杉本不二雄・高木健太郎 (同 外科)  
 関谷 政雄 (同 病理検査科)

対象: 劇症肝炎2例、急性肝炎重症型2例、慢性肝炎急性増悪2例に PGE<sub>1</sub> 製剤を投与し下記の結果を得た。投与方法は2例で PGE<sub>1</sub> 500  $\mu$ g/day 24時間持続静注 (2日~8日)、4例で Lipo-PGE<sub>1</sub> 20  $\mu$ g/day 点滴静注 (6日~14日)。

結果: PGE<sub>1</sub> 製剤投与により、1) GPT 高値3例では 4170→730 IU/l/4日、4390→428 IU/l/7日、2656→492 IU/l/7日と速やかな GPT の正常化を認めた。2) 凝固能低下の著明な3例では HPT 値10%→66%/5日、32%→78%/4日、45%→80%/3日と速やかな凝固能改善を認めた。3) 高度黄疸例2例では T-Bil 31.7→5.1 mg/dl/14日、12.9→4.7 mg/dl/11日と速やかな減黄を認めた。4) 肝性昏睡Ⅳ度の劇症肝炎例では無効であった。

10) 肝不全に対する血漿交換療法の検討

山口 征吾・佐藤健比呂  
 丸山雄一郎・畠山 重秋 (新潟県立中央病院)  
 植木 淳一 (内科)  
 高木健太郎・小山 高宣 (同 外科)

目的: 重症肝不全における血漿交換療法 (以下 PE) の有用性について検討する。対象および方法: 1991年以降に当院で PE を行った重症肝不全13例について合併症、経過、予後等について検討を加えた。結果: 13例中11例が死の転帰をとった。術後肝不全例や原疾患、合併症のコントロールが不良で、はじめの1~2回の PE で改善傾向のない症例では PE の有用性は得られなかった。PE 後に血圧低下、尿量減少、意識レベルの低下、頻脈をきたすことがあった。PE は補助療法であり、肝再生を促す積極的治療が必要である。

11) 当院における確定的ライ症候群の血漿交換療法の検討

佐藤 雅久・小林 恵子  
 今田 研生・阿部 時也 (新潟市民病院)  
 渡辺 徹・小田 良彦 (小児科)

確定的ライ症候群12例を血漿交換を中心に検討し報告した。対象は、1980年3月より14年間に当科で経験し